

『九頭竜大社の教え～自然に帰って生きる～』

出版記念講演会 講演録

日 時	平成 28 年 8 月 7 日(日) 午前 11 時～正午
会 場	九頭竜大社儀式殿
講 師	著者 執事 大西 正浩

皆さま こんにちは。

このように儀式殿いっぱいになるほど多くの方々にご参加いただき本当に嬉しく思います。ありがとうございます。

今年平成 28 年の春先から本格的に執筆活動を進めてまいりまして、どうやら 7 月の末頃には完成する見込みとなって参りまして、何とか、このように皆さま方にお話しする講演の場を設けられないものかと、そんな風に考えました。

そこで、神社のほうで日程を調整してゆきましたら、今日、8 月 7 日(日)と 11 日(木祝)のどちらかがよいということになるのです。わたくしは結構迷いました。11 日(木祝)もよいなと思ったのです。8 月 11 日は、今年からはじまる山の日ですから。この本の表紙は山の写真、九頭竜大社の境内から見える比叡山の写真を用いています。山の日にするのもいいな、でも 7 日(日)もいいな、そんな風に思っておったのです。

私は毎日神様にお祈りいたします。宗教家ですから当たり前なのですがけれども欠かすことはありません。「7 日にしようかな、11 日がいいかな。」そんな思いも持ちながらお祈りしておったと思います。すると、ふっとおみくじが引きたくなったのです。私はそんなに卒中、卒中、いつもおみくじを引くわけではありません。ある日お祈りをしたあと、ふっとおみくじが引きたくなったわけです。

ここで、少し九頭竜大社のおみくじについてお話しさせていただきます。

皆さま、九頭竜大社のおみくじは当たるでしょう。九頭竜大社のおみくじは当たるのです。信者の方々でしたら皆さま実感されていると思うのですがけれども、九頭竜大社の神様は、ほかの多くのお宮さまの神様方とは全然感じが違うのです。九頭竜弁財天大神様はすごく身近に感じられるのです。間近におられるというか、とてもよく見ておられるように感じられることでしょう。私自身も日々実感いたしておることです。そういう慈悲の女神さまで、必ず救いの手を差し伸べてくださる、救ってくださる慈悲の女神様なのです。そういう神様なのですから、あまり我を交えずに、心静かにお祈りいただければ、そうやってお

みくじを引かれたら、必ずおみくじでお返事をいただけます。九頭竜弁財天大神様はおみくじのおことばでも、私たちを導いてくださるわけなのです。この著書のなかでもおみくじのおことばの解釈例を綴らせていただいたわけなのですけれども、私は、おみくじを引かれたときにとっても大切なのは、その人が、そのとき、胸にピンと響いた感覚なのだと思います。社務所におりますとよく、このおみくじのおことばの意味は何ですかとお尋ねいただくことがあります。もちろんお尋ねいただければいいのです。「このような意味ではないでしょうか。」と私もお答えするわけですし、著書にも綴らせていただいているわけなのですけれども、本当に大切なのは、その人がそのときおみくじを引かれて、ピンと胸に響く感覚、私はそれが大事なのではないかな、と思います。

話をもとに戻します。先ほど7日(日)か11日(木祝)かで迷っていたときに、神様にお祈りしたあと、ふっとおみくじを引きたくなったのです。そこで、おみくじを引きました。すると、「七番」が出てくるのです。ちゃんと一番から十二番まであるのに、よりもよって「七」と出てくるのです。「七番」のおことばがしかも「すなほに神にすがれ」。いろいろ悩まずに素直に考えろよ、ということで「七番」です。ああ、もうこれは7日だな、と思ったのです。そういうわけで8月7日(日)にしたのです。

そんなかなで、今日、平成28年8月7日(日)に出版記念講演会を開催させていただいたわけなのですけれども、今日ご参加いただいた方はたいへんご縁のある方々だと思います。たいへん暑いなかご参加くださいます、本当にありがとうございます。

では、まず、著書を執筆したきっかけについてお話しさせていただければと思います。どうして本を書こうと思ったのかということなのですが、私が本を書こうと思いついたのは、今年、平成28年3月9日の朝のことなのです。これははっきりと覚えています。私は毎朝、ローソクの灯をお供えして神様にお祈りしているのですけれども、その3月9日の朝に、私のローソクに「お姿が出た」のです。

ご存知の方も多いと思いますが、そうでない方もおられるかもしれませんので、「お姿が出た」ローソクとはどういうことかお話しいたしますと、灯をお供えしたローソクに、竜の鱗のようにロウが垂れることを「お姿が出た」ローソクと申しまして、お姿が出るのは瑞兆である、よいお知らせであるとされています。

ではなぜ、ローソクにお姿が出ると瑞兆である、よいお知らせであるとされるようになったのか、それにはいわれがあります。

昭和29年11月24日が九頭竜大社御発祥のときである、これはご存知の方も多いと思います。この御発祥のときのことについては、また後ほどお話ししたいと思います。

昭和29年の11月24日の暁闇、明け方に、九頭竜弁財天大神様より開祖 大西正治朗に御

神託、すなわちはっきりとしたおことばが授けられ、九頭竜大社御発祥となったわけです。御発祥してすぐの頃というのは、この辺りは人の背丈ほどの笹などの草がたくさん茂っていて、今は二代目の御神木になってはいますが、そのころは初代御神木が高くそそり立っていました。そこで、御発祥してしばらくは、その初代御神木の下に、みかん箱くらいの木の箱の上に、神具屋さんですぐに買えるような既製の神棚を置いてお祀りしていたのです。それが、年が明けて昭和 30 年になって、もっときちんとした弁財天様の祠を作ろうというはなしになったのです。職人さんをお願いして祠を作り、お祀りしようということになったわけです。九頭竜弁財天大神様にご鎮座していただくということです。そして、そのご鎮座の日が御発祥の翌年の昭和 30 年 3 月 9 日となります。昭和 30 年 3 月 9 日の暁闇、ですから真夜中、午前 2 時にご鎮座の神事を行うこととなりました。その神事を行う直前まで、開祖は初代御神木のすぐ近くにあった自宅に控えておったのです。夜ですから、ローソクを何本も灯して過ごしていたようなのですが、そのご鎮座の直前になって、そのローソクに次々とお姿が出たのです。何本もローソクが灯されていたのですが、次々にお姿が出て、神様が目に見えるかたちでお慶びを示されました。この出来事より、今でも、ローソクにお姿が出るのは瑞兆だ、たいへんよい兆しだとされるのです。

今年、平成 28 年、まさにその 3 月 9 日の朝に、私のお供えしたローソクにお姿が出たわけなのです。私は毎朝ローソクをお供えしてお祈りするわけなのですが、お姿が出るのは、実に久々のことでした。たまに、どうして自分のローソクにはお姿が出ないのだろうかという相談をされる方がおられますけれども、お姿というのはそうそう出るものではありません。

ふつう、お姿が出るときというのは、ある程度ローソクが燃えていって、お名前や願いごとなどを書いていただく紙が巻かれている部分のございですが、あの辺りまで燃えていってから出ることが多いやに思うのですが、そのときの私のローソクは、かなり上のほうから、下に垂れるように、すーっと、実にきれいにお姿が出たのです。しかもそれが 3 月 9 日の朝のことであったのです。私はそのお姿が出たローソクを見て「ああ、これはもう絶対によいお知らせだ。本を書こう。」と思ったのです。

ここ数年、九頭竜大社の教えはどのようなものなのかという問いは持ち続けていたわけなのです。時には、教主の講話や、九頭竜大社の教えとはこういうことではないでしょうかということ、インターネットで配信し続けていたわけなのです。

九頭竜大社で大神様にお仕えいたしておりますと、信者の方々の声をよくお聞きするので、信者の方々のお声をお聞きすることが多いお社なのです。

「神様に助けていただいた。」

「災いごと、障りごとをきれいに取り除いていただいた。」

「すぐに願いごとは叶わなかったけれども、何年かたってから願いを叶えていただいた。」

「自分の思うようには願いは叶わなかった。でも、何年かしてから、その意味に気づかされた。確かに神様は守り導いていてくださったのだ。」

「本当に奇蹟としか思えないような不思議なお導きをいただいた。神様は私にしか分からないように導いてくださっているから、このことは人には話さずに自分の胸にしまっておきたい。」

このような信者の方々のお声はよくお聞きします。九頭竜大社で社務に励んでおりますと、信者さま方のこのようなお声を本当によくお聞きするので。

もちろん、私自身も、九頭竜弁財天大神様は、今、ここにおられて、慈悲のお力を生き生きと発揚しておられる、そういう実感があるわけなのです。

もう理屈とかはぬきに、ここに九頭竜弁財天大神様がおられて、慈悲の女神様で、千人万人 無限に人を救っておられると、そのような大きなお力を発揚しておられる神様だということは、もう、これは私のなかでは間違いないことなのです。もう、これは間違いないです。

では、そのような、無限に人を救ってくださる慈悲の女神様をお祀りしている九頭竜大社の教えとはどのようなものなのか、どのように生きていきましょうと説かれているのか、どういう心の持ち方をしてゆきましようといわれているのか、そういった問いからこの本は生まれたわけなのです。

そこで、まずは、九頭竜弁財天大神様はどのような神様でいらっしゃるのか、九頭竜弁財天大神様より御神託を授かった開祖 大西正治朗はどのように語っていたのか、そして、その開祖のはなしを長年にわたり聞き続け、教えを受け継いだ二代目 教主 大西正美は、数々の講話のなかでどのように語っているのか、そういったことをひも解いてゆきました。ですから、この本は、開祖のことばと二代目のことばで、多くのページがさかれています。

結論から申しますと、九頭竜大社の教えは単純明快です。平易に表現でき、どなたでもお分かりいただけるような教えです。

九頭竜弁財天大神様は、千人万人 無限に人を救う慈悲の女神様なのです。無限に人を救おうとそのお力を発揚しておられます。ですから、救ってくださる神様なのです。救いの手を差し伸べてくださる神様なのです。

幸いにお導きくださるわけなのですが、神様よりのお蔭を十分にいただくためには、こちら側の心構えも必要なのです。これを「心の器」と表現いたしております。神様からのお蔭を受ける側の心の器が大きくなければならないのです。心の器が小さかったり、ザルのように穴が開いていたりしたら、いくら神様がお蔭をあたえようとしてくださっていても、

簡単に漏れてしまいますよ、だから、大神様よりのお蔭をいっぱいいただける大きな心の器をつくってゆきましょう、という教えが「心の器づくり」です。

どのようにして心の器を大きくしてゆくのかということについては、著書のなかで様々に綴っておりますので、ゆっくりとお読みください。ただ、一貫して「自然に帰れ」という教えが貫かれています。

ではこの「自然に帰れ」の「自然」とはどのようなことをいうのか。九頭竜大社では、明るく、穏やかに、感謝の気持ちを持って過ごしておられることが、人として自然な状態であると考えております。素直に神様に祈って、我を張りすぎないで、無理をしないで、周りへの感謝の気持ちを忘れない、明るく穏やかに過ごしておられる状態が、人として自然なあり方なのです。その自然なあり方に帰ってゆきましょう、というのが、九頭竜大社の教え「自然に帰れ」です。そのようなことを、一人でどこかに籠るとか、何か特別な修行をするということではなく、いろいろなことが起こる日常のなかで、それこそ普段の生活をしながら、仕事をしながら、日常生活のなかで、「自然に帰れ」「心の器づくり」を実践してゆきましょう、というのが、九頭竜大社の一貫した教えであります。

さて、それではここで、開祖 大西正治郎についてお話しさせていただきます。

開祖は滋賀県出身です。意外にご存知でない信者さま方も多いのですが、今の滋賀県守山市立田町の出身です。ですから、近江富士の三上山とか琵琶湖とか、そんな風景を見ながら育っているはずであります。私も開祖の血が流れているからなのか、琵琶湖も三上山も大好きです。

開祖は大正二年生まれです。ですから、もともとの開祖の名前は、大正二年生まれの男ということで、「正二郎」でした。今に伝えられている「正治郎」と名乗るようになったのは、九頭竜大社御発祥の後、宗教家となってからであります。ちなみに少し余談になりますが、本殿のお千度道に、御発祥の石碑があります。そこに記されている開祖の名前は「正治郎」となっています。「朗」ではありません。石碑が出来たのは昭和41年のことですから、その当時は「正治郎」であったようです。おそらく昭和44年頃から現在に伝わる「正治郎」と名乗るようになったようです。

開祖は京都師範学校を出ています。今の京都教育大学です。

京都師範学校を出たのですが、どうやら先生にはなれなかったようです。おそらく肺を病んでしまったようで、それを生徒たちにうつしてはいけないということで、師範学校を出たにも関わらず先生にはなれないという挫折経験をしています。

そのあとは、職を転々とします。楽器屋を営んでいた時期もあるようです。

でも、どれもあまり長続きしないのです。開祖は無欲で天真爛漫な人物であったのです。仕事一筋、仕事バリバリといった感じの人物ではないです。音楽を奏でたり絵を描いたり、趣味が多彩で、そういったことも大切にしていたようです。商売やお金儲けがうまい人物ではなかったのです。

九頭竜大社御発祥のときの開祖の年齢は 42 歳ですから、それぐらいの年齢までは挫折経験をしたり、職を転々としていたわけなのです。努力や才能だけでは何ともならない、そのような体験を重ねてきたわけです。

さて、そんな開祖が滋賀県から京都市に移り住んでくるわけなのですけれども、はじめはもう少し町中に住んでおりました。しばらくして八瀬に移り住むようになります。

昭和 29 年頃の八瀬は、今では想像もできないくらい未開の地です。もちろんアスファルトなどはありません。砂利道ですし、もっともっと狭い道です。

叡電は八瀬駅まで来ています。バスも通るには通っておりましたが、かなり本数も少なかったはずです。

人の背丈ほどもある草が生い茂っていて、クヌギの木もたくさん生えていて、御神木となる松の木がそそり立っている、そんな風景です。夜になったらしーんとしている、耳の底がいたくなるような静けさである、そんなところでした。

開祖は今の雅楽殿のあたりに住んでおりました。静かな夜ですと、方便谷の滝の音もよく聞こえてきたのではないのでしょうか。

そして、昭和 29 年に御発祥のときを迎えます。その御発祥時のおはなしをいたします。

九頭竜大社御発祥の日は、昭和 29 年 11 月 24 日です。この昭和 29 年 11 月 24 日の暁闇に、開祖は九頭竜弁財天大神様よりはっきりとした御神託を授かります。たまに、開祖が突然この日に霊夢を見て御神託を授かり、九頭竜大社御発祥となったと思っておられる信者さまもおられます。正確には、昭和 29 年の 11 月初旬頃より、開祖は毎晩のように霊夢を見るようになりました。毎晩毎晩神の存在を信じるまで霊夢を見せられたのです。

女神様や竜、白蛇さんが出てくる夢を見続けたわけなのです。女神様であり、竜や白蛇さんが使いであるということですから、もうこれは弁財天様です。

あるときに身に黒いあざがある白蛇さんが出てきました。そしてこんな声が聞こえてきたのだそうです。

「人は目に見えぬあざを持って生きている。(時には「生まれてきている」とも)
神はその目に見えぬあざを取り除く。」

ぜひこの「目に見えぬあざ」ということばはご記憶いただきたいと思います。

もしかしたらこの「目に見えぬあざ」ということばは、九頭竜大社独特の表現かもしれません。宗教であれば、「目に見えぬあざ」目に見えない心のあざを取り除くということはいいそんなものだとも思うのですが、私の知る限りでは他では聞きません。

「目に見えぬあざ」おそらくは九頭竜大社独特の表現であると思います。

人の「目に見えぬあざ」を取り除くという声が聞こえてくるのです。

では、この「目に見えぬあざ」とはどういうことなのか。

人は弱いもので、自然に反して生きてしまうことが多いのです。

人は自然に沿って生きていれば、つまり、無理をせずに、筋道に外れたことをせずに、我を張りすぎずに、素直に、感謝の心を忘れない生き方をしていれば、幸せに生きていくことができるのです。

しかし人は弱いもので、しばしば自然に反した生き方をしてしまいます。人が自然に反してしまうことで作り出してしまう心のあざ、それが「目に見えぬあざ」なのです。

前世でつくってしまっていて、この世に生まれたときから持っている「目に見えぬあざ」もあります。

その「目に見えぬあざ」を取り除いてくださるのが九頭竜弁財天大神様なのです。

自然に反して生きてしまう人の弱さを知り尽くしておられる慈悲の女神様なのです。

開祖はそのような夢を毎晩見続けました。女神様や竜、白蛇が出てくる、そして「目に見えぬあざを取り除く」「千人万人無限に人を救う」そんな声が聞こえてくるのです。

そして昭和 29 年 11 月 24 日の暁闇に、九頭竜弁財天大神様より開祖に、はっきりとした御神託が授けられます。

十二単のお姿の女神様が、神使である竜や白蛇を従えられて霊夢に現れ、御神託をお授けになったのです。

『汝の身を社にする

千人万人無限に人を救う

奇蹟をもって速座に守護を與える

神は人を救って神界に上る』

(御神託ゆえあえて「速座」と記します)

「大西正治朗、お前の身を社とする

神は千人万人無限に人を救わんと願う

神の奇蹟の力でもって速やかに人々を守り導こう

神は人を救ってこそ神界に上るのだ」

こういった意味です。

はっきりとした御神託を授かったのです。

ですから、人が自然に反して生きてしまうことによって作り出してしまう「目に見えぬあざ」前世でつくってしまっていてこの世に生まれたときから持っている「目に見えぬあ

ぎ」を取り除き、千人万人無限に人を救おうとそのお力を発揚しておられるのが九頭竜弁財天大神様なのです。

このように御神託が授けられて、この後に少し続きがあります。

九頭竜弁財天大神様は開祖に「汝に薬を授ける」とお告げになります。

開祖が手を差し出しますと、手のひらの上にはずしんと重たいものをのせられます。タラの子のような粒粒を透明なビニールに包んだようなものだったそうです。この粒粒は無限に人を救うことをあらわしています。

やり場がなくて、開祖がその薬を懐にしまい込んだところハッと目が覚めた、寝汗をびっしょりとかいていた、それが御発祥時にあった出来事です。

この「薬」のお話しがもととなってできたのが、「護符」です。

御発祥翌年の昭和 30 年より伝わるお守りで、砂糖に寒梅粉を混ぜご神前で御念が込められている粉薬のようにいただくお守りです。もともとは五角形の紙包みだったのですが、それではふつうの粉薬と間違えてしまうということから、開祖の独創で六角形となりました。九頭竜弁財天大神様の神使の白蛇の鱗をかたどったといわれています。

ですから、護符は、自分の目に見えぬあざを取り除いていただく薬なのだという気持ちで、祈念を込めていただかれるとよいのです。

御発祥して間もない頃は、特に大神様の奇蹟のお力が発揚されました。

開祖は自分で宣伝をするような人物ではありません。

神は「奇縁でもって人を引く」ということばが伝わってきています。本当にその奇縁でもって、神様のお力でもって人が引き寄せられるようにお参りになったのです。たくさんの人々がお参りされるようになってゆきました。

九頭竜大社には「9回まわるお千度」が伝わってきています。

このお千度は、熱心にお参りされるようになった信者の方々が、自然と本殿をまわるお千度をはじめられたそうです。あるとき信者の方が「本殿を何回まわってお千度したらよいのですか。お千度というのですから、千回も百回もまわるものなのではないですか。」と開祖にお尋ねになります。この問いに開祖は「9回でよいですよ。」と答えました。

きっと九頭竜弁財天大神様の御祭神名にちなんだか、一桁で最大の数字の「9」に神の無限の加護を感じ取ったのでしょう。

いずれにしても、開祖が「本殿をまわってお千度をしましょう。」と言い出したわけではなく、熱心な信者の方々が自然と本殿をまわるお千度をはじめられ、信者の方の問いに答えた開祖のことばにより、まわる回数が9回になったわけです。それが今に伝えられてきているわけでございます。

さて、開祖 大西正治朗ですが、やはり、九頭竜弁財天大神様から御神託を授かるような人物です。「神の社」という状態。ものすごく靈感が鋭かったのです。

常人では到底分からないようなところまで見通せたわけなのです。

御発祥間もない頃より開祖による「おつなぎ」が行われるようになってゆきました。信者の方々の悩み、苦しみに一対一で向き合う対談、「おつなぎ」とよばれるようになりました。この「おつなぎ」が本当に的を射ていたのです。開祖はふつうでは分からないところまでを見通し、的確に答えたのです。この開祖と一対一で行われる「おつなぎ」を通し、神の実在を確信された人々がさらに熱心に信仰されるようになってゆきます。「おつなぎ」は昭和 30 年から昭和 50 年代にかけてさかんに行われました。

「おつなぎ」は一対一で行われ、目の前の信者の悩み、相談に開祖が答えるというかたちで行われていました。

この「おつなぎ」のほかに開祖は、多くの信者の方々の前で講演のようなかたちでおはなしすることもしばしばありました。開祖が九頭竜弁財天大神様のことやその教えについておはなしする講演、「御親話会(ごしんわかい)」とよばれました。この著書には、開祖が数々の「御親話会」で語ったことばが綴られております。

開祖はたいへん人間味あふれる人物で、人間味あふれるやさしい話し方をいたします。やはり魅力のある人物であったのだと思います。

ただ、開祖の話し方というのは、「起承転結」「理路整然」としてすっきりと終わるという感じではないのです。キラリと光ることばが出てきたと思ったら、はなしが脱線していつて、またキラリとしたものすごくいいことを言う、開祖の講演はそんな感じなのです。ですから、開祖の講演は、おそらく 2 回とか 3 回とか聞いただけではすっきりとは分からないと思います。長年にわたり何度も何度も聞いてゆかないとその全体、教え、本当に言いたいことは分からないのではないかと思うのです。幸いにも二代目 教主 大西正美は、その開祖の話を長年にわたり聞き続けてきたわけなのです。二代目は開祖の示す教えを聞き取り、探求し、さらに深めていつております。教えはしっかりと受け継がれているのです。二代目のことばは、開祖のことばとはまた違い、理路整然としていて、たとえ話も多く、教えが深められております。

開祖のキラリと光ることば、開祖から教えを受け継ぎさらに深く探求をすすめた二代目のことばを、この著書から読み取っていただきますれば幸いです。

九頭竜大社の教えは単純明快なのです。

九頭竜弁財天大神様は、人の「目に見えぬあざ」を取り除き無限に人を救わんとされる慈悲の女神様なのです。まずはその慈悲の女神様に素直に手を合わせお祈りしましょう。

もちろん神様は苦しいときにその大きな慈悲のお力で守りお導きくださるのですが、人間の側の心構えも大切です。「心の器」が大きくなければ、神様からお蔭をいただいてもすぐ

に漏れてしまいます。その心の器を大きくしてゆくことを「心の器づくり」といいます。どのように「心の器づくり」をすすめてゆくかは、著書に様々に綴られておりますが、一貫しておりますのが、「自然に帰れ」という教えです。

人として「自然」な状態とは、感謝の心を忘れず、道理に反したことをしない、あまり我を張って頑張りすぎない、すなわち無理を除く、「感謝」「無理を除く」周りへの思いやりの心を持って、明るく穏やかに過ごせる状態です。この自然な状態に帰ってゆけるように「心の器づくり」をすすめてゆきましょう。それを、一人でどこかに籠るですとか特別な修行をするということではなく、色々なことがおこる日常生活のなかで実践してゆきましょう、お仕事をするなかで、普段の生活の営みのなかで、「自然に帰れ」「心の器づくり」を実践してゆきましょう、これが、九頭竜大社で一貫して説かれている教えです。

九頭竜大社では毎月 24 日に感謝祭が行われます。

その毎月 24 日の祭典では必ず教主により「天地清浄の祝詞」が奏上されます。

そのなかにこのような一節があります。

『目に諸々の不浄を見て心に種々(くさぐさ)の不浄を観ず
耳に諸々の不浄を聞いて心に種々の不浄を聴かず
鼻に諸々の不浄を嗅ぎて心に種々の不浄を嗅がず
口に諸々の不浄を言ひて心に種々の不浄を語らず
身は諸々の不浄に触れて心に種々の不浄に触れず
意に諸々の不浄を思ひて心に種々の不浄を想はず』

毎月 24 日の祭典で教主により奏上されています。聞き覚えがある信者さま方も多いと思います。

日常生活のなかで九頭竜大社の教え、すなわち「自然に帰れ」「心の器づくり」を実践してゆくために大事なポイントが説かれているのです。

この天地清浄の祝詞は、ごくごく簡単に申しますならば、日常生活のなかでいろいろなことがあってもあまり気にするな、そういうことがいわれているのです。

日常生活を営んでいますと、いやなことを見聞きしたり、いやな思いを抱いてしまったりいたします。そのようなときでも、必要以上にイライラしたり、気にしすぎてしまったり、感情におぼれたり、何かにこだわりすぎてしまったりしてはいけません。そのようなときでも、さらさらさらさら受け流してゆきましょう。そうやって自然に帰って、素直に神に祈って、幸いに人生をお導きいただきましょう、天地清浄の祝詞にはそのようなことが説かれているのでございます。

このように九頭竜大社の教えは単純明快なものなのです。日常生活のなかで「自然に帰れ」

「心の器づくり」を実践し、素直に神に手を合わせ幸いにお導きいただきましょう、そのような教えです。九頭竜弁財天大神様は必ず人をお救いくださる慈悲の女神様です。必ず人を幸いに守りお導きくださいます。

皆さま方今後ともよき信仰生活を続けられますよう、また著書をお読みいただき、その教えを実践されますよう、心より祈念いたしまして、講演を結びにいたしたく存じます

皆さま方、暑いなかのご参加まことにありがとうございました。